はじめに

今日の日本の体育・スポーツとその組織的なありかたは、大きく様変わりしようとしている。その動向を大まかに特徴づけるとすれば、「生涯スポーツ」の時代といえることができよう。そこにおける主導的な局面は、産業化・商業化を契機とした国民のスポーツ要求およびその実現可能性の深化・拡大である。大学体育関係者の直面している一般教養・正課体育をめぐる問題もまた、そのようなスポーツ動向と深くかかわることになる。いま、「教職」や公務労働を主要な社会的基盤として成立していた日本の体育界とその学問的基礎が、大きく変動しようとしているのである。

だが、市場メカニズムのなかでのスポーツの本格的な展開は、スポーツを発展させる潜勢力、潜在的な主人公が国民であることをも自明のものにした。「生涯スポーツ」時代とは、実は、スポーツに対する国民の要求と意志が、スポーツのありかたを決定する時代であることをも意味しているのである。

われわれは、そのような認識に立って、世界と日本のスポーツの現実と理論を見据えながら、大学におけるスポーツ教育とスポーツ科学の体系を構築せねばならない。広範なスポーツ愛好者・国民・専門家・大学人の支持と協力をえながら、教育活動と研究活動を日常的に統一し、それをスポーツ教育・科学の体系化の作業に連動させること、そこに大学体育の未来がかかっているといえるだろう。

この冊子は、われわれの普段の努力の結晶であり、1990年度に体育共同研究室が行った定例研究会(5回)と研究合宿(1泊2日、1回)の概要を研究年報の形式で収録したものである。その主な内容は、日本における政府・財界のスポーツ戦略、スポーツの産業化とスポーツ運動に関する動向および理論分析、東欧のスポーツ動向に関する歴史・社会学的分析、フランスにおけるスポーツ社会学研究の動向分析である。発表された研究と討論の基調をなすものは、「国際的な視野をふまえた日本のスポーツ現実・理論の批判と創造」である。

今回、われわれの年報発行事業は、10周年を迎えることになった。体育・スポーツと大学体育が変動しようとするなかで、既存の枠にとらわれない情報の交流とネットワーク化が求められている。体育共同研究室が刊行してきた一連の年報が、ささやかではあれ、そのことに貢献することを、われわれは心から願っている。

1991年5月

体育共同研究室長 高津 勝